

日本ラテンアメリカ学会 会 報

№ 2 4

1987年4月10日

第24号 目 次

1. 理事会報告
2. 学術文化情報
3. 定例研究会
4. 新刊書紹介
5. 近着会員業績
6. 事務局から

○ 第8回定期大会のお知らせ

1. 理事会報告

第32回理事会 1986年12月6日(土)

場 所：上智大学

出席者：中川(理事長)、アンドラーデ、石井、
加茂、国本、水野(以上理事)

○ 審議事項

i) 理事長代行の設置について

中川理事長より理事長代行設置提案があり、年齢順により水野、アンドラーデ、石井の順で万一の場合に理事長代行を務めることが承認された。

ii) 87年度の学会定期大会について

大垣理事より書面にて定期大会シンポジウムのテーマを「戦間期のラテンアメリカ」、一分科会のテーマを「ラテンアメリカの文学」としたい旨の報告があり、理事会はこれを了承。尚、大会の日程の決定については主催校に一任することで了承した。

iii) 入会・退会希望者の審査

5名の入会希望者、1名の退会希望者があり、審査の結果これを承認した。

iv) 500年祭準備委員会について

同委員会の構想について次回理事会でアンドラーデ理事が提案することを承認した。

v) 次回理事会について

1987年3月27日開催に決定。

○ 報告事項

i) 中川理事長より年報の編集状況について報告があった。

ii) アンドラーデ理事より、9月30日東京で開催された日中両国ラテンアメリカ研究者交流会議について報告があった。理事会としても今後韓国をも含めて、日中韓3カ国の間でこのような交流を進めていくことで合意がなされた。

○ 理事交代

1987年4月より海外出張となる国本理事に代わり、小林致広氏(神戸市外大)が新理事として承認された。

2. 学術文化情報

ラテンアメリカ原住民問題研究会

本研究会は1982年7月の第1回以来、85年12月の第22回まで3年半にわたって研究会を続け、メンバーも当初5名程度から最終的には14名を数えるまでになった。原住民という主題は、歴史、文化の基底をなすラテンアメリカ研究の出発点であり、また本質部分をなすとの共通意識から本研究会の命名となったものであるが、メンバーの専門分野は考古学、歴史学、文学、人類学、教育学にわたり、研究報告も先史時代メソ・アメリカ、植民地期

の土地制度史や原住民反乱、独立期における原住民の役割、インディヘニスモ文学、地域的にはカリブ地域、メキシコ、ブラジル、ペルーにおける原住民の歴史的位罫、インディヘニスモ運動の動向など多岐にわたり、結果的に原住民問題のテーマのかなりの部分が含まれることになった。

研究会は当初同志社大学で、のちには京都外国語大学にて開催され、しめくりに淡路島にて合宿を行なった。本研究会の一応の成果は、1987年1月発行の『南欧文化』（第12号、文流）において掲載されている。なお、本研究会はさらに広範な枠組みからラテンアメリカの諸問題にアプローチするという趣旨から、『ラス・アメリカス研究会』として再発足することとなった。研究会についての問合せは、京都外国語大学メキシコ研究センター（TEL 075-312-3388）まで。

（文責・辻豊治）

日中ラテンアメリカ研究者交流会議

1986年9月30日、東京にて日中學術交流会議が開かれ、日本側からはアンドラーデ、細野昭雄、加茂雄三各氏が、中国側からは中国社会科学院ラテンアメリカ研究所副所長徐文淵氏が参加した。同会議では、両国におけるラテンアメリカ研究の動向・現状をめぐって有意義な報告と意見交換が行なわれ、今後も両国間の研究者交流を進めていくことで合意がなされた。

Federación Internacional de Estudios sobre América Latina y el Caribe (FIEALC) 第3回会議開催のお知らせ

FIEALC 第3回会議は来たる9月23~26日、ニューヨーク州立大学(バッファロー)で開催される。テーマはEvaluación Crítica de los Estudios Latinoamericanos.

問合せ先

Dr. Jorge J. E. Gracia (Presidente de la SILAT—Society for Iberian and Latin American Thought) or Dra. Amy A. Olivar (Secretaria de le SILAT), Department of Philosophy, Faculty of Social Sciences, State University of New York at Buffalo, Amherst, NY 14260

TEL: 716-636-2444

3. 定例研究会

西日本部会研究会

西日本部会の研究会は南山大学ラテンアメリカ研究センターとの共催により、《ラテンアメリカの教育問題》のテーマのもと1987年2月28日(土)午後2時から南山大学で開かれ、3時間余にわたって、2人の講師による興味深い報告とそれに続く熱のこもった質疑応答が繰り上げられた。出席者は理事の大垣貴志郎氏(京都外国語大学)を含めて20名ほど。

第1報告者のJudith Alvarado-Migeot(ジュディット・アルバラード=ミジョ)氏はベネズエラ生まれで、1981年パリ大学で教育博士号を取得。3月まで筑波・青山学院両大学で非常勤講師を務めた。第2報告者の米村明夫氏はアジア経済研究所研究員で、1952年生まれ。東京大学大学院修士課程(教育学)を修了後、同研究所に入所し、1981~83年海外派遣員としてメキシコに滞在した。

報告1.

ベネズエラにおける初等教育の

イデオロギー：教科書を通しての分析

J. A. = ミジョ氏

ミジョ氏の仮説的前提は、ベネズエラ文部省が採択してきた小学生向けの「国語読本」には子供の社会化に及ぼす重要なイデオロギ

一が含まれているというもので、氏がそれを検証するために1945～72年の間に出版された代表的な6冊(全体で456課にわたる)の内容分析を量的および質的手法の両方のレベルから行なった点に、方法論の独創性がうかがえた。こうして氏は「労働」・「家族」・「社会」・「自然」・「祖国」・「神」などの使用頻度を明らかにし、それらの国語読本での扱われ方を詳しく分析した。しかしながらそこから導き出した氏の結論は、これらの言葉が理想化された状況を述べるだけで現実を表現しておらず、あいまいである、との指摘にとどまった。しかし後の質疑応答で、結論に関する氏自身の解釈が加えられて本報告の意義が深められた。

報告2.

メキシコの経済発展と社会経済構造

米村明夫氏

米村氏の報告は体系的かつ緻密なもので、会場に資料として提供された図や統計資料を用いて、上記表題に則した明快な解説が呈示された。主要点は、メキシコ現代社会に関してこれまで日本語で著わされた最も優れた書の1つと考えられる氏の近著『メキシコの教育発展—近代化への挑戦と苦悩—』(アジア経済研究所、1986年)(本会報No23〔1986年12月10日〕に皆川卓三氏による書評あり、pp. 4～5)から抽出したもので、ここでは割愛する。

以上2報告は、ミジョ氏の場合は内容分析の新しい手法で、また米村氏の場合は教育社会学・教育経済学による体系的アプローチで、皆川氏の言われる他のラ米諸国の解析に有効な方法論を切り開いてくれたものと信じる。また当日の研究会の盛り上りは、松下洋氏の鮮やかな通訳・司会ぶりによるところ大であったことを付記したい。(文責・三橋利光)

第8回定期大会のお知らせ

第8回定期大会は、1987年6月13,14日、神戸市立外国語大学にて開催される予定である。

4. 新刊書紹介

○水野 一編『ラテンアメリカ社会と貧困』
上智大学イベロアメリカ研究所、1986年
10月15日発行、B5判110p.

本書は、昭和57～58年度の上智大学学内共同研究「ラテンアメリカ社会と貧困」の報告書であり、また同大イベロアメリカ研究所から出されている「ラテンアメリカ・モノグラフ・シリーズ」のNo.3である。

本書は論文集の形をとっており、以下紹介とコメントを行なう。

水野一「ラテンアメリカの貧困—その実態、原因および対策—」はこのテーマを概観するものである。Iはじめに、II貧困の実態、III都市の貧困—インフォーマルセクターの拡大、IV貧困の原因、V貧困対策となっている。その基調は従来の経済成長政策では貧困はむしろ拡大し、新しい方策が探られているというものである。

Gustavo Andrade “Por qué América Latina es pobre?”は、The Atlantic Monthly (March, 1982)に載ったMichael Novakの同題の論文に対する批判論文である。すなわちNovakの議論が、歴史的・具体的条件を無視した南北アメリカの比較を中心に、米国を弁護し、ラテンアメリカ文化にラテンアメリカ地域の貧困の責を負わせようとするものであることを指摘する。

堀坂浩太郎「累積債務問題と貧困—ブラジルの賃金抑制策を中心として—」は、1982年のラテンアメリカの金融危機以来各国でと

られている賃金抑制策の分析を、ブラジルの賃金法令改正過程をケースとして行なっている。そこでは、79年から81年にかけて格差は正に向っていた所得分布が81年から83年に悪化したことが報告されている点が注目される。すなわち、賃金抑制策は、低所得者層には緩かなものはずであったにもかかわらず、危機下において低所得者層の受ける打撃が相対的にも大きいことがうかがわれる。

高山智博「メキシコ市における貧困——原住民の場合——」は、メキシコシティの街頭で果物を売るマサワ族の出身農村の状況、出かせぎ事情、シティに住みついていく経過を扱っている。最近の生活事情の厳しい印象が語られる。

Vendelino Lorscheiter “O problema da pobreza e a Igreja Católica” は、1968年、1979年の司教会議における貧困の定義、クロドヴィス・ボフの教会と貧者の関係についての3期区分——「貧困の教会」「貧者のための教会」「貧者と共にある教会」——を示したうえで、ラテンアメリカおよびブラジルにおける貧困解決のための教会の活動を整理、紹介している。

ホルヘ・アンソレーナ「発展途上地域のスラム——ラテンアメリカとアジアの比較——」は、インドの例を中心としてアジア、ラテンアメリカのスラムの現状を述べた後、スラム発生、拡大の原因、望ましい都市開発のあり方について簡単な考察を行なっている。

清水憲男「小説の現実性と現実の小説性——バルガス・ジョサの場合——」は、政治的・精神的貧困、腐敗現象にメスを入れ、告発する作家、ペルーのマリオ・バルガス・ジョサについて『ラ・カテドラルでの対話』を念頭におきながら、考察している。

佐野泰彦「ブラジルの文学における貧困の問題」は、このテーマを、I. 近代主義以前

の文学：Pobreza individual, II. 北東地方の貧困と文学：Pobreza nacional, III. 現代の文学における貧困：Pobreza internacional, IV. 貧困をうたう：Pobreza nas canções populares の各節で検討している。

本書のメリットは、ラテンアメリカの貧困問題を考える際の良き入門書であるという点である(末尾に参考文献が挙げられている)。限られた時間、予算、人材で効率的で時宜に適した研究、成果の出版といえる。

しかしながら、あるべき学術論文の追求が学界の発展に必要であるとするなら、若干の批判的コメントが許されよう。

堀坂論文は手堅い仕事として読み応えがあったが、他の4論文(評者の語学、文学能力の欠除から、Lorscheiter、清水、佐野3論文はコメントの対象としない)については、オリジナリティに抛る知的刺激、学界への貢献という点で不満が残った。日本における外国研究の困難さはいうまでもなく、また、評者自身このようなことをいう資格などないことを百も承知であえていえば、時間をかけてじっくりテーマに取り組んでいくこと、それを通じて新たな成果が生まれていくことを期待したい。(米村 明夫)

○林峻一郎著『リマの精神衛生研究所』中央公論社、1986年、v, 235p.

大平健一著『貧困の精神病理—ペルー社会とマチスター』岩波書店、1986年、xi, 282p.

昨年、奇しくも精神病理学者の手になるペルー関連の本が2冊刊行された。2人の著者が日本の経済援助によって1982年に開設されたリマの「国立精神衛生研究所」に関係していたという意味では「奇しくも」は当たらないかもしれない。しかし両書の性格はまった

く異なる。一方が、このプロジェクトの責任者としてペルーに渡った著者が五里霧中から辛うじて研究所の開設にこぎつける体験談を豊かな学識と確かな筆致で描かれたエッセーであるのに対し、他方はリマの貧民街におけるケース・スタディを踏まえ、貧民階層の「性格構造」を明らかにするという意図のもとに書かれた研究書である。したがって両書を同時に関連づけてとりあげるのは困難であり、また評者がこの分野についてまったくの門外漢であることから、以下では各々についてその読後感を書きつらねるに終始せざるを得ない点をあらかじめことわっておきたい。

まず林著のなかで、ペルーという国について「古めかしい伝統的個人主義と現代化に焦慮する社会である」ととらえるが、この著者もまたこの狭間のなかで苦慮することになった。しかしこれは必ずしも著者が、現代化の立場から伝統主義を批判するという意味ではなく、この現代化の方向を不可避の趨勢としてとらえている点が重要である。著者がペルー体験から得たテーゼとする「地方色より普遍性への道」の文脈において、この精神衛生研究所プロジェクトはたとえ普遍性への必然の道であっても、著者は絶えず「大きな援助プロジェクト（は）……たとえ善意に基づくものであろうとも……既存の平衡状態と秩序を乱すことになる」という自戒とともに能率万能の日本社会の対岸にあるこの社会にむしろ共感をもつと告白している。著者の語り口はきわめて謙虚であるが、援助のあり方あるいはそれ以上に低開発社会との関わり方についての重要な示唆を与えてくれる。なお、精神衛生研究所の所長はハビエル・マリアテギ博士であるが、彼が本書では「啓蒙的共産主義者」として紹介されているマリアテギの三男であることは、ペルー現代史を研究対象とする評者にとって感慨深い。

他方大平著では、リマ北部に広がる貧民街の一つ、インデペンデンシア区における精神衛生的臨床活動をつうじて住民の特有の「性格構造」を、「過剰なまでの男性性の誇示」を意味するマチスモと規定した。さらにその肉体を生んだ母性への崇拜が生じ、聖母信仰が現れるとし、マチスタ（男性性）と「聖母達」（母性性）の親和性が指摘される。以上の性格は中産下層までも幅広く認められるが、その基底にあるのは貧困に基づく心の貧困あるいは貧困への恐怖であるとする。以上の指摘はとくに目新しいものではないが、従来メキシコ人の特徴的な性格としてとりあげられてきたことをペルーにおいても実証し、比較研究の視座を提示した点で、きわめて貴重な研究といえよう。しかし著者は結論を日本社会の分析に持ち込む。終章においてペルーのマチスモと日本のヤクザ社会の共通性をみるが、しかしはたして「貧困の文化」という文脈で両者を括ることができるか疑問であるし、もし両者の共通性を前近代的な社会関係としてとらえるなら、逆に貧民街の社会経済的な位置づけが問題となろう。このような混乱は「貧困の文化」そのものの分析の欠如に起因するのではないかと考えられる。本書の分析は、ラテンアメリカ研究の立場からはマチスモと政治との関わり、具体的には軍政への態度、政党支持の傾向など、研究の広がりが見られる。

蛇足ながら「はしがき」(iv頁)における各国の貧民街の名称について、チリのカジャンパは「(群生する)キノコ」の意味であって「中折帽子」では意味をなさない。またメキシコのコロニア・プロレタリアというのは研究者の用語であり、一般的にはシウダー・ベルディダ、ソナ・ミセリアあるいはコルドン・ミセリアなどが使われている。ブラジルのファベラは丘のうえに群生するマメ科の灌木

の意味である。

(注 豊治)

○Wakatsuki, Yasuo y Iyo kunimoto eds.,
*La inmigración japonesa en Bolivia : Estudios
históricos y socio-económicos*, Tokio :
Universidad de Chuo, 1985, pp.243.

本書は、5人の研究者（日本人3人、ボリビア人2人）によるボリビアの日本人移住に関する論文集である。

本書の構成は次のようになっている。

- I. 序章
- II. ボリビア日本人移住史
- III. 日本人移住者一世：その生活と態度
- IV. 「同化過程にある世代」の意識と現実
- V. 日本人集団地6地域の日本人子孫：その生活と態度
- VI. サンタ・クルス州の日本人移住地の経済活動
- VII. 結び

まず第I章では、研究の動機、目的、方法等が紹介され、本書が書かれた経緯が理解される。1982年と83年の2回にわたって、ボリビアの日本人移住に関する社会調査が行われ、この調査で得られた資料を用いて各々の研究者の関心から論述されたのが、III、IV、V章の3論文である。この現地調査は、ボリビアの日本人移住者とその子孫の現状を把握するとともに、ボリビア移住の意義を明らかにしようとする意図をもって行われ、このことは、そのまま本書の意図となっている。調査は、日本人移住者とその子孫、さらに社会、経済的にこれら日系人と接触のある非日系人に対して、主にアンケートを用いる形式で行われた。II、VI章は、この社会調査に現地スタッフとして参加したボリビア人研究者の論文である。

第II章は、ボリビア移住史の素描である。

本章は、III、IV、V章で分析される日系人の歴史的背景であり、これら3論文の導入部となっている。第2次世界大戦をはさんで移住の目的、形態、地域等においてまったく異なる2つの流れがあったことが指摘される。すなわち、戦前のボリビア移住は、賃金労働による出稼を目的にした成年男子の単身移住（推定2000人）で、結果的にボリビア東北地方に定住したものは、わずかの数でしかない（推定340人）。一方、戦後のボリビア移住は、関係国政府の援助を受けて、家族移住による日本人移住地建設を目的に行われた計画移住である。当初より移住者の定住が意図されていた。この計画移住により、サンタクルス州内に2つの日本人移住地—オキナワ移住地、サンファン移住地—が1954年57年に各々建設され、総数4996人（1037家族）に及ぶ移住者が、沖縄と日本各地（主に長崎県）から各々の移住地に移住したが、一方では多数の退植者を出した。日本に帰国するか、あるいは近隣諸国に再移住した他に、退植者の一部は、ラパス市やサンタクルス市に転出して、ボリビアで都市生活者となった。都市生活者の出現は、農村生活者と並んで、現在、ボリビアの日本人移住者の社会的・経済的な様相が多様化しつつあることを窺わせている。

こうした歴史的背景をもつボリビアの一世から四世に及ぶ日系人（1605人）の社会、経済、意識の側面のアンケート結果を分析し論述したのが、III、IV、V章の3論文である。地域間、世代間、非日系人との比較を通じて、現在のボリビアの日本人移住者とその子孫の生活様式や態度を浮彫にすることを試みている。最後の論文のVI章では、2つの日本人移住地の経済活動の分析により、ボリビア社会における日本人移住の具体的な貢献が提示される。そして日本・ボリビア両国政府の援助によって実現された日本人移住地の建設は、

ボリビア政府にとって永年の懸案であった東部低地開発にひとつの肯定的な結果をもたらしたものとして評価を与えている。本書全体からみれば、本章は、序章で示された本研究の意図に対するひとつの結論である。

終章の結びでは、5論文の総括がなされるとともに、ボリビアの日本人移住者の足跡が単なる移住史に終わらずに、日本とボリビア2国の関係史の重要な部分であることが指摘され、ボリビア移住研究が、今後の両国関係史研究のひとつの道標でもあることを示唆している。

本書の特徴は、日本人移住者集団をボリビア社会のひとつの社会集団として把握分析するのでなく、個々の移住者の現地社会への「同化」の様子に関心をもたれ、この視点から調査、分析がなされているところにある。こうした観点に立つと、ボリビア移住の意義が、移住者の経済活動と並んで、移住者の「同化」の状況からも求められることになり、本書が、論文集とはいえ、結果として一応まとまりのある一つの研究書に仕上がった要因ともなっている。また、本書を通じてボリビアの日本人移住者の社会、経済かつ歴史的側面を概観することができるという意味で、本書は、日本人移住についての研究書の中で、数少ないボリビア移住に関する貴重な研究書のひとつとなっている。(三田千代子)

5. 近着会員業績

〔誌〕『東海大学文明研究所紀要』第6号

(東海大学文明研究所 1986.3)

〔抜〕浅香幸枝「榎本移民監督、農学士 草鹿砥寅二についての一考察」(『国際学論集』第17号 上智大学国際関係研究所 1986.7)

〔誌〕『イベロアメリカ研究』Vol. VII, No.2

(上智大学イベロアメリカ研究所 1986.7)

〔抜〕三橋利光「ブラジルにおけるオーギュ

スト・コント実証主義の受容と展開I — 年次回覧にみるブラジル実証主義者教会の活動 [1881~98] —」(『イベロアメリカ研究』Vol. VII, No.2 1986.7)

〔籍〕『南欧文化』第12号(文流 1987.1)

〔籍〕山崎春成著・大阪市立大学経済研究所編『世界の大都市3 メキシコ・シティ』

(東京大学出版会 1987.2)

〔籍〕ルイス・スポタ(内田實訳)『権力のシナリオ 大統領のワンマンショー』(メキシコ文庫 1986.10)

〔抜〕吾郷健二「メキシコ農業の国際化 — 農業における国際分業の意味 —」(『西南学院大学経済学論集』第21巻第3号 1986.12)

〔抜〕江口信清「農民社会・プランテーション・国家の相互関係 — 西インド諸島ドミニカの事例 —」(『立命館文学』第493~495号 1986.7~9)

〔抜〕江口信清「カリブ海地域農民社会の母中心家族研究の再検討 — ドミニカの事例 —」(『立命館文学』第496~498号 1986.10~12)

〔抜〕江口信清「カリブ海地域農民社会のムラ — ドミニカの事例 —」(『季刊人類学』16-3 1985)

〔抜〕江口信清「農民間の非平等性とランキング・システム：ドミニカ農民の事例研究」(『民族学研究』49/4 1985.3)

〔抜〕江口信清「西インド諸島社会農民の世界観雑考 — ドミニカの事例 —」(『農学原論研究ノート』No.1 京都大学農学部農学原論研究室 1985.3)

〔抜〕江口信清「ドミニカ農民の「市」活動」(『農学原論研究ノート』No.2 1985.9)

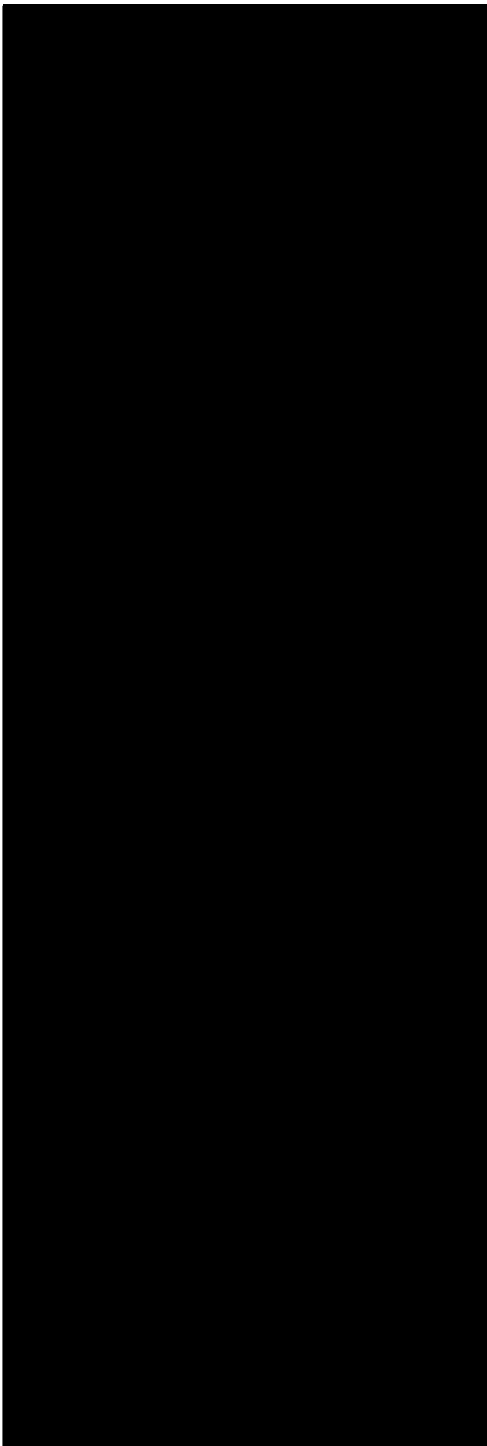
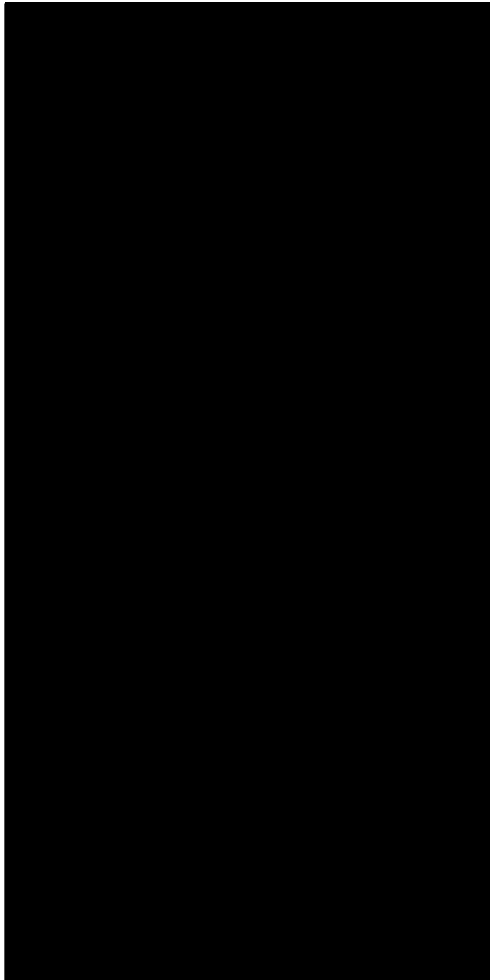
〔抜〕江口信清「ドミニカ島の農民たち」(『季刊民族学』No.31 1985.1)

〔籍〕Kazuo Ohgushi, "La Doctrina de Seguridad Nacional y las Dictaduras en América Latina" en *Los Caminos del*

Laberinto : Crítica, Sociedad y Política (Lima, Perú), No.4 (Diciembre 1986), pp. 85-93.
内容要約：ラテンアメリカ諸国の軍人の政治思想に大きな影響を及ぼしている国家安全保障ドクトリンの論理と形成過程を、チリ、ブラジル、アルゼンチン、ペルーを例にとって、方法論的に考察する。目次は、Introducción, I. Elementos Fundamentales de la DSN (a) Geopolítica (b) Militarismo Profesional (c) Estado y Sociedad (d) Anticomunismo (e) Seguridad y Desarrollo, II. Evolución Histórica.

6. 事務局から

i) 新入会員



No. 24 1987年4月10日発行
〒157 東京都世田谷区成城6-1-20
成城大学法学部中川研究室内
日本ラテンアメリカ学会事務局
☎03-482-1181